

社会教育資料 38

井 辺 前 山 10 号 古 墳

発 掘 調 査 概 報

和 歌 山 市 教 育 委 員 会

序 文

本市井辺前山地区も最近のご多聞にもれず開発がどんどん進められていますが、この古墳は市民の皆様方のご協力により、破壊寸前に調査をすることが出来ました。

調査は同志社大学の森浩一先生をわずらわし関係者のご尽力により極めて順調に運ばれましたことはこの上もない幸せなことでした。

土地所有者をはじめ森先生や同志社大学文学部の学生諸氏のご協力に厚く御礼を申し上げます。

なお、調査は主体部となる石室の発掘をおこなわずに、墳丘の測量と造り出しの部分の調査のみに限定しましたが、本古墳は地区の盟主的存在であることには変わりなく、原型のまま永く保存すべきものと思われまますので関係各位のご協力をお願いする次第です。

昭和44年3月30日

和歌山市教育長 稲垣 優

和歌山市井辺前山10号墳調査概報

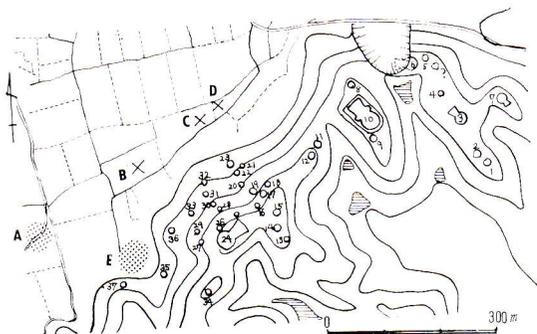
森 浩 一

1. 調査までの経過

井辺前山10号墳は、和歌山市森字西原谷1837番地にあり、八幡山という通称が古老の間にかろうじて残っている。この古墳の属している井辺前山古墳群は、広義の岩橋千塚を構成する一支群ではあるが、花山、大日山、大谷山・前山などにくらべ、文化財行政からもまた考古学からも、その存在や価値が認識されることがおくれたことは遺憾であった。

たとえば昭和38年に和歌山県教育委員会から刊行された『和歌山県遺跡地名表』には井辺前山10号墳は収録されておらず、付近の古墳として「神崎山古墳」が記録されているにすぎない。つまり、この時点では、井辺前山10号墳は周知の遺跡でなく、行政的に保護できなかつたことはやむをえないのである。

この古墳群のある通称福飯が峯山塊は、かつては松や雑木でおおわれていたが、昭和30年代の後半から蜜柑畠として開墾されることがはげしくなり、また山塊麓が岡崎団地造成などで切崩される事態が生じ、そのため32号墳と36号墳の発掘が行なわれるなどして、にわかに有力な古墳群として注目されるようになった。



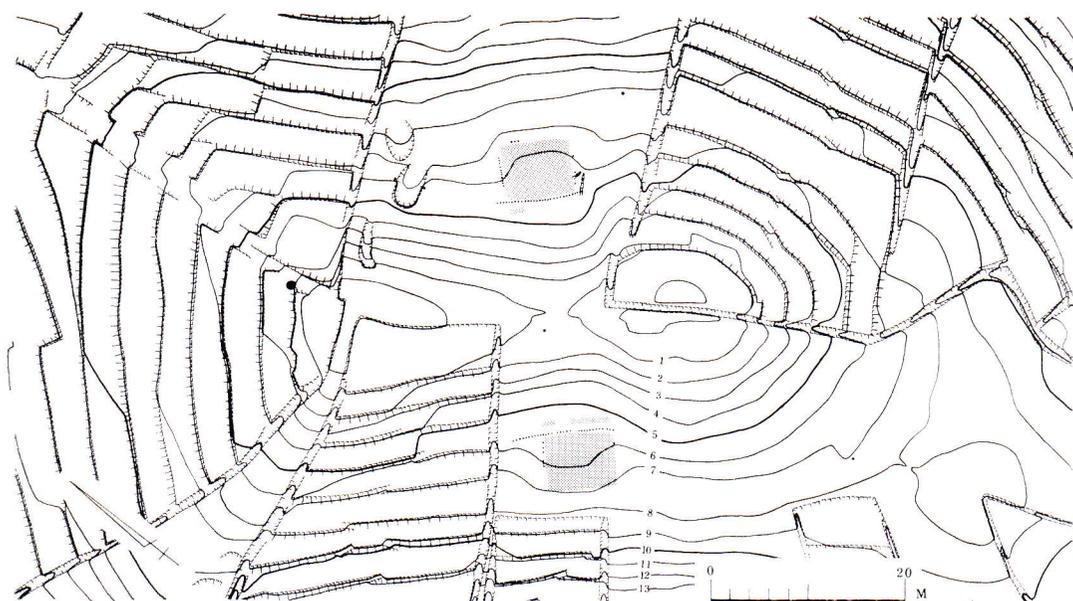
第1図 井辺前山10号墳の位置
(A～Dは井辺弥生遺跡の土器
出土地点、Eは岡崎縄文遺跡)

そこで和歌山市教育委員会では、この山塊にたいして第1次分布調査を行ない、古墳群の分布範囲をおおむね把握するにいたった。この計画の遂行には、市内鳴神在住の研究者大野嶺夫氏の献身的努力におうところが多い。

井辺前山古墳群の実態がようやく判明しかけたころこの群の盟主的存在である井辺前山6号墳(前方後円墳・全長54m・後円部に横穴式石室)か土砂採取場となり、破壊に先立って和歌山県教育委員会によって発掘が行なわれた。それまではほぼ完好な形態を残していた古墳群だけに、また破壊の動機となった事業の社会的な公共性の比重からみても、それを保護行政で防ぎえなかつたことは何としても痛恨である。このことは土取工事の終わった今日、後円部の半ばが切断され放置されている状態を見るにつけ、不可避の破壊であったとは考えがたいのである。

このような事態に対処するため、和歌山市教育委員会ではこの地区の徹底した分布調査を計画し、その実施を関西大学に委嘱した。その結果、井辺前山古墳群は円墳37基、前方後円墳5基で構成されていることが確認された。井辺前山古墳群の実態がようやく判明し

かけたころ、それまでは2基の円墳かと推定されていた八幡山が実は壮大な前方後円墳であることが知られるようになった。この大古墳を十分理解できなかつた原因は、自然地形を利用して山頂に営まれていたことや開墾による変形にもよるが、それにもまして狭義の岩橋千塚以外にこれほどの大墳丘があることを全く予想しなかつた先入観にわざわざされていたこともいぬめない。残念なことには、井辺前山10号墳が前方後円墳であろうといわれた昭和41年頃には、後円部東側半分、前方部正面の全域および西側半分が蜜柑畠に開墾されつくし、墳丘の表面を変形するとともに、三重目(下段)を圍繞する円筒埴輪列の大半と、二



第2図 墳丘測量図
(黒点は円筒埴輪, アミ目は造出しおよび遺物群)

重・一重目の円筒埴輪列の約半数が除去された。この作業中、円筒埴輪列に伴って形象埴輪の出土したことが一部の好事家の小規模な乱掘をまねき、さらにくびれ部に付設された造出しの埴輪も、損傷をうけはじめた。

また土地所有者の中には蜜柑畠の開墾の拡大を計画し、それを市教委に連絡してきた。このような新事態にかんがみ、保護行政の資料を作製するため、まず墳丘の測量の必要が生じた。さらに将来完全に保護措置がとれたとしても、造出しに露出する埴輪は现阶段で処置をする必要があるので、墳丘測量と造出しの調査の2目標にしばって、昭和43年度の和歌山市教育委員会の事業として、国および県の補助金をえて調査を実施することとなり、私とその遂行を委嘱された。この調査は、文化財保護資料を作るという明確な動機をもち、また古墳研究上に造出しの究明という意義が認められるのでこれを承諾した。

2. 調査の経過

調査は、同志社大学文学部文化学科考古学研究室の学生の参加をえて、昭和44年2月21日から4月5日ま

で続した。すでに述べたように、この調査は墳丘測量、西側造出しの発掘、東側造出しの発掘の3作業に大別されるので、それぞれ伊藤勇輔、辰巳和弘、前園実知雄君に指揮してもらったが、伊藤勇輔君にはさらに全体の進行の責任を分担してもらった。また大野左千夫君には写真撮影を担当してもらった。このほか、田中敬忠、宮田啓二、巽三郎、白石太郎、大野嶺夫の諸氏からは援助や助言をいただいた。また調査の事務局として尽力していただいた和歌山市教育委員会、とりわけ塩路保雄、竹光健次の両氏に感謝する次第である。

3. 墳丘の調査

井辺前山10号墳は、福飯が峯山塊の北々東よりの最高所を占有しており、後円部頂上の海拔は54mである。したがって、古墳からみて西方向にある井辺弥生集落の埋没する平野からの比高は50mをはかり、この平野にたつと、前方部の正面をあとぎ見ることができる。墳丘は山塊の頂部を利用しているため、盛土は部分的に行なっており、くびれ部では逆に岩盤を削り取った跡が見られる。



第4図 西造出しとくびれ部

- ① 有孔大甕 ② 中段円筒列
- ③ 盾形埴輪と裝飾付器台
- ④ 人物埴輪（右側は、はだしの人物）



第5図 西造出しくびれ部での埴輪の遺存

- ① 馬形埴輪 ② 人物埴輪頭部
- ③ 脊をばく人物埴輪脚部

墳丘は、自然地形に制約されているとはいえ、典型的な前方後円形をしており、くびれの両側に方形の造出しを備えている。便宜上、西造出し、東造出しの名称を用いる。墳丘は、未開壟部でみると、3段に築成され、基段にあたる1段目は造出しのやや下方、2段目は造出しのやや上部にある。表言をかえると、造出しは平面的には1段目の段にあり、立体的には2段目の段から突出している。しかし2段目は上方からの流土で埋没している部分が多く、試掘の結果、元巾約2mであったことが知られた。3段目、つまり最上段はくびれ部で狭くなっているが広い平坦面を形成している。後円部の南方に9号墳が接して構築されており陪塚かとも考えられる。9号墳と後円部との間だけ切り通しになって空濠状を呈しているが、これは地形によって生じた結果で、10号墳には全体としての濠はもちろん存しない。

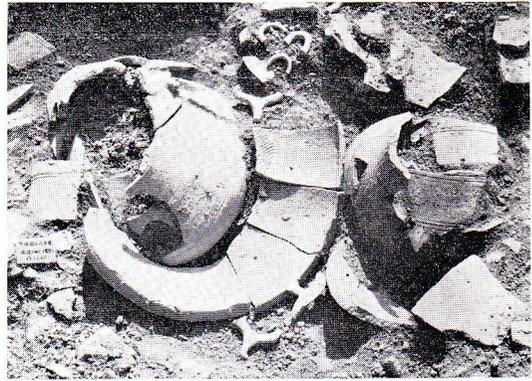
また、墳丘には葺石を使用していないが、これは岩橋千塚でも共通していた。この古墳の規模は、墳丘のすそをおさえることがむずかしく、細部の把握にこまるが、一応次の数値を掲げておく。全長88m、後円部径44m、前方部端での巾56m、後円部頂と前方部頂はほぼ同高であり、前方部では高さ約11m、後円部は南方の尾根こつづく部分では頂上より8m下ったところまで墳丘としての修築を行っていない。

4. 埴輪列

円筒埴輪は、上・中・下の3段に閉鎖している。このうち中段の円筒列は、両造出し部の基部、つまりくびれ部においてその一部を調査した。

西造出しとその基部

中段の円筒列からコ字形に突出したか円筒の列で区画されている造出しは、7m×6mの広さを有しているが、遺物の配置では、中段の円筒列でへだてたくびれ部と関連して考えるべきである。まず中段円筒列に接したくびれ部では、3個の須恵大型甕が岩盤にうがった穴に底部をすえておかれていた。3個とも土器の底部に孔をあけていた。この部分にはさらに須恵器台と壺各1があった。ついで、2個の馬形、鳥形、武装人物埴輪各1があり、さらに須恵の裝飾付器台1があった。なお馬の横には厚手の粗製円筒が1個ずつおかれていた。これらの埴輪は、造出しの基部にだけある



第3図 裝飾付器台の遺存状態 西造出し

ものか、それとも中段円筒列の内側に、ある間隔で配置されたものかは不明である。造出しでは、人物埴輪9、盾形埴輪1が主要なものであるが、人物の多くは遺存状況はよくなかった。

土器は中段円筒列にそって、つまり、先ほどの有孔の大甕列の西方に列状になって、須恵器の裝飾付器台3、子持高杯（または盤）1、裝飾付有杯1があった。さらに造出しの中央部に杯1、高杯40が群存しており、その大半が蓋を伴っていた。この群存中に裝飾付耳杯1がおかれていた。土器の大半は須恵器であるが、土師質高杯が2個あった。このほか、人物や馬形埴輪には、須恵器の高杯各1個が伴うことが多く、それらの埴輪を対象として供献の風があったことを知りえた。なお数個のヌガサ埴輪がくびれ部に遺存していたが、原位置をとどめるものではなく、いずれも上段埴輪列外から転落してきたものであろう。

東造出しとその基部

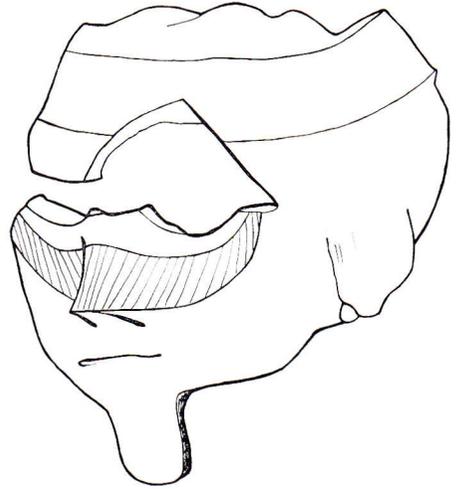
中段円筒列から小円筒列でコ字形に区画され7m×6mの広さを有する。この造出しで注目すべきは、造出しの後円部よりの部分に排水施設があった。それは円筒埴輪を土管状に利用したもので、くびれ部の水と造出しの水を、それぞれ2列の土管で出すが、先端は同じ溝へ集めている。くびれ部には、西側ほどには遺物の配置はなかったが、人物埴輪1個がおかれていたようである。土器は全く存在しなかった。なおヌガサ埴輪があったが、原位置のものはなかった。

造出し内部では、家2、人物15、馬1、猪2、鳥1、双脚輪状形の埴輪などがあった。造出しの北よりには武人埴輪が多く、中間には土器群があって、南よ



第10図 鷹形埴輪 (長15.2cm)

—東造出し—



第11図 あごひげをつけ、鼻の上とその左右に刻線、彩色のある人物埴輪 (高さ13cm、ひげをのぞく)

—東造出し—

りには馬と猪それに武人でない人物がおかれていた。その人物の1つには鷹形埴輪が伴っていた。須恵器は大型壺3、器台4、台付子持壺2、台付壺1、裝飾付高杯(または、器台)1などが3群になって整然とおかれていた。

5. 結 語

今回検出した遺物はそのほとんどが細片となっており、目下その整理が進行中であるため、正確な遺物の種類や数量には及びがたく、そのため遺物配列の意味についてもふれにくい点があり、ここでは井辺前山10号墳の調査の要点を簡単に述べておきたい。

この古墳は、出土した須恵器や埴輪、とくに馬形埴輪に装着された馬具の型式などから6世紀初頭前後に構築されたものと推定される。両くびれ部に造出しを備え3段築成からなる典型的な前方後円墳であり、しかも規模では前・中・後期を通して紀伊最大である。この古墳の築かれた6世紀ごろは、前代にくらべ全国的、とくに畿内において前方後円墳の規模が小さくなるが、吉備最大のコオモリ塚や出雲最大の大念寺古墳(いずれも後期に限る)が井辺前山10号墳と同規模で

あることはきわめて意味深い。すなわち、出雲・吉備・紀伊の後期における最大の古墳がいずれも前方後円墳でしかもほぼ同規模であることは、それらの地域の豪族の恣意の選択による偶然の結果ではなく、それらの地域の豪族たちを墓制上から支配する政権が中央に存在したことを物語るのであろう。したがってこの古墳にあっては、墳形・墳丘そのものがきわめて重要な価値をもっているのである。

井辺前山10号墳の埋葬施設は今日のところ不明である。土地の人々が伝えるように前方部に石室が埋没していたとしても、それはこの古墳の中心的な被葬者を葬るものではなからう。この古墳の中心となる被葬者用の埋葬施設は後円部に埋まっていると推定される。その施設は、岩橋千塚の諸例から推測して、すでに粘土槨や堅穴式石室でなく、横穴式石室であろう。それは多分後円部の南方か西方の中段に開口するものであろう。このように予測すると、埋葬施設の開口部に近い西造出しと、それから遠い東造出しでは性格が異なることもあるだろう。

西造出しの顕著な特色は、形象埴輪とともに使用されている多数の土器群のもつ意味である。ここでの土

器は大部分が須恵器であるが、使用法から4種に大別できる。

- I. 掘りすえられた有孔の大型甕群
- II. 掘りすえられた器台群、とくに人・鹿・猪・鳥の小彫刻をつけた装飾付器台群
- III. 無雑作にかため置かれた杯と高杯の群
- IV. 馬や人物埴輪に1個ずつ供えられた高杯

この場合、I・IIは、形象埴輪の多くが岩盤に穴をあけ台部を固定させているのと同じ扱い、つまり永久にその場所に置く意図がうかがわれる。このように考えると、装飾付須恵器は、日常用途をもつのではなく葬具として製作されたものの可能性が大きい。IIIは葬送儀礼にともなった飲食・共食の跡を示しているのではなからうか。井辺前山10号墳と年代の接近する奈良県新沢千塚の約100基の古墳（調査済の分）は木棺直葬墳であるため、葬送儀礼の跡を時間の経過をおってたどることができた。その場合、木棺埋葬後に、棺の周辺または直上で一群の杯や高杯がおかれ（棺上儀礼と仮称）、さらに盛土完成後に封土上で器台と壺を使用する儀礼（墳上儀礼と仮称）が行なわれていることが多い。井辺前山10号墳のIII型は、新沢千塚の棺上儀礼の大規模なものと考えられるが、この儀礼では葬礼に集った人たちが共食したのか、それとも死者が飲食したと信じる儀式であったのかを詳らかにできない。なお東造出しでの須恵器のあり方は、新沢千塚の墳上儀礼に共通した面が大きい。このように井辺前山10号墳での造出しの遺物群は、当時の葬送儀礼をときあかず手がかりになるが、すでにことわったように埴輪の整理の進行によってさらに総合的に理解できるだろう。

今回出土した遺物には注目すべきものが多いが、とくに2個の装飾付耳杯は作品としても、また文化系譜のうえからも重要である。第9図に示したものは出土した2個のうちの小なる方であり、中央に水鳥、左右に2匹の鹿、耳の端に犬（一端にも何かの付着の痕跡がある）を飾っている。この杯部は、中央でやや深くなっているから、水や酒を入れるとその中に鳥がうかび、その周辺に鹿や犬がいる状況になる。これを耳杯と命名したけれども、漢代の耳杯に直接つらなるものではなく、この場合は耳が長辺の両端についている。

このような耳杯は、筆者の知るかぎり、伝奈良県出土¹⁾の土師製品（脚と装飾なし）と、大阪府堺市松尾大塚の後円部出土の子持高杯に付された小耳杯があるにすぎない。松尾大塚は、井辺前山10号墳と須恵器型式がほぼ同期に属す小型の前方後円墳であった。

東造出しの鷹埴輪は、学術調査としては最初の出土である。しかも6世紀初頭、むしろ古墳の被葬者が生存した5世紀末葉に、はやくも鷹狩の風習がこの地方にも伝播していたのは、それが北方起源であることを想起すると古代史にも問題をなげかける。また東造出しから出土し、細片となっているため目下復原中の人物の顔に注目すべきものがある（第11図）。それは内へまがっているあごひげをつけており、鼻を真中にしてその左右へ長い鰐面をへら描であらわし、その上に赤色顔料を塗っている。この頭のうしろには1本の長い結髪がつく。この鼻上鰐面かと思われる表現は、西造出しの人物にも見られる。なお人物埴輪には脊をなくものと、足指まであらわした跣のものがあり、この相異に鰐面の有無が関係するとすれば、ここでの一群の人物埴輪の構成の意味するところはきわめて示唆的である。

以上この古墳についての中間見解をまとめたが、今回の調査を契機にして、強力にして迅速に保護行政上の措置をこうじられることを要望する。とくにこの古墳のすぐ北方までがいわゆる「風土記の丘」の地域に指定されつつあるから、広義の岩橋千塚として最大のまともにも保存のよいこの前方後円墳を除外しての保存行政には賛成できない。すみやかに本古墳を「風土記の丘」の指定地に追加するとともに、井辺前山古墳群全体にたいする保存を前提としての基本調査の開始をも要望してやまない。

〔註〕

1. 柿本義弘氏所蔵
2. 昭和38年に消滅した前方後円墳。全長20m、後円部径11m、前方部端の巾8m、周濠があった。遺物は後円部から各種須恵器と滑石製紡錘車だけを確認した。
3. 学術調査例ではないが、群馬県佐波郡境町淵名出土の鷹匠埴輪が名高い。



③

①

②

第6図 東造出し

- ① 家形埴輪
- ② 沓をはく人物埴輪脚部
- ③ 人物埴輪から脱落した矢筒形



①

②

第7図 東造出しと
排水施設

- ① 中段円筒埴輪列
- ② 造出しの排水土管列



第8図 人物埴輪(高さ22cm)

—西くびれ部—



第9図 裝飾付耳杯

(長径28cm, 短径17.5cm, 高さ7cm, 裝飾部をのぞく)

—西造出し—

発掘参加者

森 浩 一	大野左千夫
白石太一郎	水谷二郎
伊藤勇輔	山下俊郎
辰巳和弘	瀬戸実
前園実知雄	渡部明夫
田中弘道	酒井妙子
安藤邦明	広瀬常雄
望月佳子	清水眞一
北出万里子	音村政一
湊アヤ子	池田幸夫

昭和44年3月31日

編著者 同志社大学文学部考古学研究室
森 浩 一

発行者 和歌山市教育委員会

印刷者 堤印刷所

